

第2回研究集会 発表要旨

縄文時代葬墓制研究の現段階

2019.12.7(土)・8(日)

於 日本大学文理学部 百周年記念館国際会議場・本館センターホール

縄文時代文化研究会

開催日程

2019年12月7日(土)・8日(日)

日本大学文理学部 百周年記念館国際会議場・本館センターホール

第2回研究集会

縄文時代葬制研究の現段階

●第1日目 12月7日(土) 司会：山田 康弘

11:00～11:10 開会の挨拶

11:10～11:20 趣旨説明

基調講演 11:20～12:20 「縄文時代の葬制研究をめぐって」……………山本 暉久

地域別基調報告

「縄文時代における葬制研究の現状をめぐって」

13:50～14:20 「北海道地方における葬制研究の現状」……………藤原 秀樹

14:20～14:50 「東北地方における葬制研究の現状」……………小原 一成

14:50～15:20 「関東地方における葬制研究の現状」……………西澤 明

15:30～16:00 「中部・東海・北陸地方における葬制研究の現状」……………長田 友也

16:00～16:30 「近畿・中国・四国地方における葬制研究の現状」……………岡田 憲一

16:30～17:00 「九州・沖縄地方における葬制研究の現状」……………宮地聡一郎

●第2日目 12月8日(日) 司会：長田 友也

テーマ別基調報告

1) 埋葬施設からみた縄文葬制

9:30～10:00 「土坑墓」……………坪田 弘子

10:00～10:30 「配石墓・石棺墓」……………阿部 昭典

10:30～11:00 「土器棺墓(土器埋設遺構)」……………中村 大

11:00～11:30 「家屋墓・廃屋墓」……………中村 耕作

2) 葬法からみた縄文葬制

11:30～12:00 「すぐには埋めない墓-遺体の埋没状況-」……………青野 友哉

12:00～12:30 「遺体の二次的処理-複葬をとりまく関係性-」……………阿部 友寿

3) 社会へのまなざし

13:30～14:00 「集落と墓域構造からみた社会」……………鈴木 保彦

14:00～14:30 「縄文時代における葬制の変遷と社会複雑化」……………谷口 康浩

4) 新たな方法論とのコラボレーション

14:30～15:00 「理化学分析の応用による社会への接近」……………日下宗一郎

5) 葬制研究における課題と展望

15:00～15:30 「縄文葬制研究の課題と展望」……………山田 康弘

総合討論 15:40～17:10

17:10～17:30 総括コメント……………戸田 哲也・設楽 博己

17:30～17:40 閉会の挨拶

目次

開催にあたって

基調講演

山本 暉久 「縄文時代の葬墓制研究をめぐって」	1
-------------------------	---

地域別基調報告「縄文時代における葬墓制研究の現状をめぐって」

藤原 秀樹 「北海道地方における葬墓制研究の現状」	5
小原 一成 「東北地方における葬墓制研究の現状」	13
西澤 明 「関東地方における葬墓制研究の現状」	21
長田 友也 「中部・東海・北陸地方における葬墓制研究の現状」	31
岡田 憲一 「近畿・中国・四国地方における葬墓制研究の現状」	39
宮地聡一郎 「九州・沖縄地方における葬墓制研究の現状」	47

テーマ別基調報告

1) 埋葬施設からみた縄文葬墓制

坪田 弘子 「土坑墓」	55
阿部 昭典 「配石墓・石棺墓」	63
中村 大 「土器棺墓（土器埋設遺構）」	71
中村 耕作 「家屋墓・廃屋墓」	79

2) 葬法からみた縄文葬墓制

青野 友哉 「すぐには埋めない墓－遺体の埋没状況－」	87
阿部 友寿 「遺体の二次的処理－複葬をとりまく関係性－」	93

3) 社会へのまなざし

鈴木 保彦 「集落と墓域構造からみた社会」	101
谷口 康浩 「縄文時代における葬墓制の変遷と社会複雑化」	109

4) 新たな方法論とのコラボレーション

日下宗一郎 「理化学的分析の応用による社会への接近」	117
----------------------------	-----

5) 葬墓制研究における課題と展望

山田 康弘 「縄文葬墓制研究の課題と展望」	123
-----------------------	-----

家屋墓・廃屋墓

中村耕作

1. 呼称・定義・分類の問題

家屋墓・廃屋墓などの呼称、定義（範疇）、分類は、この種の遺構を論じる際の最大の論点であった（近年の論点については山本 2015）。以下に、観察可能なエティックな視点による代表的な分類として堀越正行（1986）案を挙げるが、廃屋墓を A に限る説、B に限る説、A I を含む／含まないなど論者によって多様な見解が提示されている。

A：住居床面に葬る I：放置もしくは遺棄する／II：姿勢を整え安置する

B：住居覆土に葬る I a：覆土層を掘らず、覆土中に安置する／I b：覆土層を掘り、覆土中に埋葬する／II：覆土層を掘り、床面を坑底として埋葬する／III：覆土層を掘り、床面をも掘り下げて埋葬する

問題は、こうした状況に対し、当時のエミク的な意識（埋葬／安置／放置・遺棄・忌避、住居機能の継続／廃絶、計画性、廃絶住居や凹地の帰属・継承意識の有無）を混在して分類に取り込みがちであったことにある（中村 2018b）。本稿では、遺構としての堅穴住居跡床面～覆土から人骨が出土した事例を「家屋墓」と呼ぶ。また、これに床下土坑への埋葬を含めた場合には「家屋墓」と総称する。便宜的に洞穴・岩陰は対象外、覆土中に構築された墓坑は対象に含める。

2. 研究の意義と本稿の目的

（1）国際的な葬墓制研究における意義

家屋墓に相当する語として、英語の Residential Burial、中国語の居址葬・居室葬がある。2007 年、アメリカ考古学会総会で Residential Burial のセッションが設けられ、成果が 1 冊にまとめられている（Adams and King eds. 2011）。その冒頭論文では、「住居から離れた墓地とは全く異なる意味がある可能性」から注目されるものとし、対象は、床下、壁内、床上のほか、集落中央や、住居の前後なども含まれている。同書の各発表は社会的記憶（継続）、アイデンティティ、権力、社会的再生（結合）が中核的テー

マとして選ばれたとされる。Toohey ら（2016）の研究動向整理も同様である。これらは葬送研究一般にも適用可能なキーワードであるが、特に「住人と死者が住居内埋葬を通して互いに結びついている」という視点が他の葬墓制と区別して重要なポイントである。一方、李永強（2017）は中国先史時代の居址葬を洞穴、住居床下、床面、建物周辺の 4 種に分類し、床下例を典型とする。谷口康浩（2017a）は、縄文時代の環状集落と環状墓群の相似性や柄鏡形住居と環状列石の形態類似を指摘し、こうした「墳墓と住居の共通レイアウト」を、ブリテン新石器時代のモニュメントとの共通点として挙げている。家を中核とした死者の取扱いの探求は国際的な研究意義を共有するのである。

（2）縄文時代葬墓制研究における意義と本稿の目的

縄文時代研究においては、さらに下記のような重要性も指摘できる。本稿では、これらの具体的な研究例を紹介し、縄文時代葬墓制研究の幅と質を広げたい。

- 1) 堅穴埋没の段階などの細かいタイムスケールを用いることで、葬送儀礼の過程を検討することができる。
- 2) 廃屋墓出土人骨はしばしば解剖学的位置を保っておらず、長期にわたる遺体への関与を示唆する。
- 3) 1 棟に複数の遺体が葬られる例からは、個人同士の関係性を検討できる可能性がある。今後の DNA 分析に期待したい。
- 4) 1～3 の視点を組み合わせることで、複雑な葬送システムを検討することができる。ここには、追葬や改葬・再葬の問題も含まれる。また、隣接する複数の遺構の関係にも考察が及ぶ。
- 5) 土坑墓（配石墓を含む）中心の葬墓制研究を相対化することが可能であり、同一時期における複数の葬墓制の関係という研究課題を得ることができる。

3. 廃屋墓における葬送儀礼の諸行為

はじめに、東京湾岸の事例をもとに、廃屋墓で行われた諸行為の痕跡を再配列し、葬送儀礼の過程を可能な限り復

元してみたい(中村2016)。なお後期例には*を付す。

(1) 各遺体に対する行為

①墓坑 複数の事例で墓坑が検出されている(寒風1住、草刈B207B、中峠3次1住4号人骨[図5]、同5次1住4号人骨、高根木戸3住、加曾利南108住(旧JD16)62土坑・同73住(旧12住)34人骨*、曾谷E4住*、殿平賀*)。覆土から掘り下げたとみられるもの(有吉南354住、草刈H439)もあるが、覆土から掘り下げたものか、浅い墓坑かは不明なものも多い。

②枕石 寒風1住では墓坑検出の人骨頭部の下に焼けた礫石が検出され、枕石の用途が推定されている。

③底面整備 中峠3次2住5号人骨では「貝層下土層は上面がならされてあった」。加曾利南21住*、曾谷E4住*では人骨下に灰が敷き詰められていた。

④遺体の姿勢 一次葬の場合、伸展葬か屈葬をはじめとする埋葬姿勢が選択される。

⑤着葬品 生前から着装していたか、死後着装されたかは不明だが、男性の鯨類骨製腰飾、女性の貝輪などの着装知られている。

⑥副葬品 浅鉢(草刈B551、大田区千鳥久保)、深鉢(高根木戸26住)、土錘・石錘・石鎌・石斧(祇園4住W外)、倒置土器内に貝輪(中峠3次2住)、注口土器(加曾利南*、宮本台*)。

⑦赤色顔料 中峠貝塚5次1住4号人骨の「左足に接して「朱」と思われるものや貝殻が一個検出された」という。曾谷E4住*では、人骨周囲に「微量のベンガラと推定される赤い粉」が検出されている。

⑧土器の被覆 廃屋墓の例では、人骨の頭部に倒置されるものは19例と多い。完形、大形破片の選択がある。他に、胸部(高根木戸26住)、頭部と胸部(草刈B195)、頭部～胸部に土器片集中(加曾利南16住*)の例がある。

⑨遺体の放置 全身が解剖学的位置を保っていない事例(姥山B9住)や、齧歯類の噛み痕を持つ事例(新宿区市谷加賀町二丁目3住、草刈、大膳野南*)があり「空隙環境」にあったとみられている。

⑩遺体の一部移動・改葬 子和清水1962年調査例[図4]の1号人骨は頭骨全体・頸椎、2号人骨は頭蓋骨・第一頸椎が存在しない(下顎骨は残る)ため、前者は白骨化前、後者は白骨化後の頭部・頭蓋骨の取り去りと判断される。有吉北096住のA人骨は、隣接する097住下層出土の7片のうち左脛骨が接合しており、接合しない右脛骨破片、頭蓋骨破片も同一人物のものであり、白骨後の取り扱いの可

能性が指摘されている。千葉南菜子(2019)は両住居の間に存在する小堅穴(SK122)の2体の人骨の1体は改・追葬されたもので、その時期に096住の人骨の一部が切断されたと解釈した。隣接する3つの遺構にまたがる議論として注目される。他に、向台38住の18号人骨は、右大腿骨が40cm離れた穴から出土している。加曾利南21住*の10号人骨は、頭部が胴部から約20cm離れて検出されている。また、廃屋墓からは多くの部分骨が出土しており、改葬行為と考えられる(中村2018bも参照)。

⑪土・ロームブロック・灰の被覆 姥山貝塚ではA2住で「黒褐色土の上に置かれ、略同様な土に蔽はれて小円墳を呈し、B堆積貝層の貝殻僅かにこれを蔽ひしもの」、A7住で「床上一五糎の高さに在り、上に黒色土を以て高さ約八〇糎程の土饅頭を築きたるもの、如く、更にこれを赤土で薄く蔽へるも、足方に於てはこれを欠き、又上部は処々陥没せるが如き様を呈せり」と記録されており、遺体ごとに土饅頭状の被覆が行われたと思われる。こうした明瞭なマウンドは確認されていないが、市谷加賀町二丁目3住では、四肢骨が解剖学的位置を保っていたのに対し、頭部はやや離れ、その傍らに深鉢が横転していることから、頭部に土器を被覆し、体は土で覆ったと考えられている。また、中峠3次1住では、3号人骨下腹部や5号人骨の右肘上や腰・膝の右脇にロームブロックが置かれ、5号人骨はさらに、遺体の頭から足先までを覆うように灰(報告では灰混じりの二枚貝層)が広がっていたらしい。

(2) 遺体群・堅穴全体に関する行為

⑫合葬・追葬、イヌの埋葬 人の例については別項参照。草刈H489住、菱名B1住でイヌの埋葬が伴う。

⑬イノシシの供献 床面の人骨付近から検出された例(中峠3次1住1号人骨)、覆土・貝層中から少数が検出された例(市谷加賀町二丁目3住、北川J51住)、頭骨以外を含めた多数のイノシシ骨その他の獣骨が貝層中から検出された例(草刈B516)がある。

⑭堅穴の被覆 遺体個別ではなく、堅穴全体を土または会で覆う。ローム質土の例として、姥山B9住の「五体ハ堅穴床面ニ接シ、其上ニ褐色ナル硬キ土ヲ被リシ為、保存状態ハ中等度ナリシモ採集ニ困難ヲ感ジタリ」の報告が著名である。中峠貝塚では、人骨の部分だけでなく堅穴全体を覆うものであったことが明らかにされている(3次1・2住、5次1住)。秋山向山SI02では、覆土(下部土層)全体がロームブロックを含む埋め戻し土であった。

貝層がマウンド状に堆積している例(中峠5次1住、同

3次2住〔図5〕、寒風1住）もある。

⑮**焚火** 加曾利南21住では4体の人骨を覆う混土貝層の上面全体に灰と焼土の広がり確認されている（※姥山B地点3号堅穴（小堅穴）の2号人骨にも焚火痕跡がある）。

⑯**柱の抜き取り** 加曾利北29住の再整理でピット内からカモ垂科・イノシシ・シカ骨が検出され、上述の焚火の後に柱が抜かれ、骨が投入されたと想定されている。また、草刈B516住では、断面図によると柱上の上部貝層が落ち込んでおり、貝層堆積直前の柱の抜き取りが想定できる（中村2018b）。

⑰**廃屋墓の重複** 草刈B区、根郷では廃屋墓が重複しており、集落内に特定エリアが形成されていた可能性がある（高橋2007、中村2018b）

4. 追葬・改葬の実態と統合的理解

（1）複数葬における諸行為

次に扱うのは複数の人骨が出土する廃屋墓である。東京湾岸の廃屋墓出土人骨の71%が該当するが、その垂直的位置は多様で、廃屋墓の範疇や分類をめぐる議論が行われてきた。ここでは、遺体の埋葬レベルと人数で類型化し、各類型の代表事例をもとに、1つの住居跡で行われる一連の行為の実態を確認する。特に、これまで重視されてこなかった部分骨にも注意を払いたい（中村2018b）。

①同一層位（床面）に多人数の遺体を配置する事例

姥山B9住〔図1〕 床面から5体の人骨が検出され、一家全滅・忌避家屋説が提示された。床面に2～5号人骨が重なり、やや離れて1号人骨が配置される。土井義夫（1985）は報告中の「褐色ナル堅キ土ヲ被リ」の記述から、放置説に疑義を提示した。さらに佐々木藤雄（1986）や花輪宏（1995）は、1号と他との時間差を主張した。堀越正行（2006）は「土被せ葬」と呼び、5体がそれぞれ異なる姿勢で、4号→5号→3号→2号→1号の順で、白骨化前に葬られたとした。渡辺新（2006）はさらに詳細に出土状況を検討し、法医学的な観点から、5号から1号への順で、いずれも「葬の姿勢」で配置された後、死体の腐朽によって骨の位置がずれ、その後に土で被覆されたと解釈した。また、この堅穴の不相応に大きな柱穴を、密閉のための厚い土屋根を支えるものと推定し、遺体収容専用の建物であったことを論じた。報告書では炉体土器のみが示されるが、勝坂3式の古手に位置づけられる。

②複数層位（床面～覆土）へ多人数の遺体を配置する事例

草刈B516住〔図3〕 主な覆土は、1層：混土貝層、3層：破貝を含む暗褐色土、4層：ハマグリ・キサゴを含む暗褐色土、8層：ローム粒を含む黒褐色土である。床の周囲は「ベッド状」とされるように約10cm高まっており、9層：ローム粒主体の褐色土が乗る。人骨は4体、東西南北の壁寄りから検出されている。C・D人骨は床面直上。A人骨は「下の床面が若干埋没した時点で」ベッド状遺構にかかるようにして検出されており、おそらく8層の堆積途上に配置されたと思われる。さらにB人骨は「覆土中」とされ、現場写真を観察すると9層中と思われる。既に花輪宏（1995）が時間差を指摘しているように、C・D→A→Bという時計回りで計画的に葬送が行われたことが明らかな事例として重要である。A～C人骨が成人骨なのに対し、D人骨は幼児骨で下肢骨を欠損している。A人骨の右大腿骨以下の下肢骨が関節した状態でやや離れて検出されており、石川健（2014）が軟部組織のある段階で離断したことを想定している。また、報告書では特に記載がないが、南北の覆土断面図には主柱穴P3の部分のみ1層が3層・4層を切るように落ち込んでいる。このP3からは矢筈・骨角製品が出土しているとされ、加曾利北29住の例が想起される。つまり、下部土層が形成され、Bの遺体が配置されるまで上屋が遺存した後、柱が抜かれ、貝層が堆積したという過程を推測できる。さらに、出土位置は不明だが、「貝層中」からE人骨（手指骨を含むほぼ全身）、F人骨（鎖骨のみ）、G人骨（ほぼ全身）が出土している。覆土中からは最小個体数で33体ものイノシシ骨破片をはじめ多量の鳥獣骨・魚骨が出土しており、祖先との共食が推定されている（高橋2007）。復元可能な土器は勝坂3式、阿玉台IV式、大木8a式など中期中葉の範疇に収まるが、破片資料では拓影が不鮮明なもの加曾利E式を含む。他に、中峠3次1住〔図5〕でも床面～覆土から4体が検出されている。

③同一層位に少人数の遺体を配置する事例

草刈Q132住〔図2〕 主柱穴P4に足が落ち込むように1号人骨が検出されている。報告書では「上体は床面上にあり」とあるが、写真を見ると上半身、特に頭骨は2層中に配置されていたらしい。P3の上面は2層を切って貝層が落ち込んでおり、1・2層堆積時の柱の遺存、その後の抜き取りの可能性が指摘されている。2号人骨（幼児）は炉の上部、「覆土」中からの検出である。写真から高さを推定すると貝層ないし1層中と思われる。すなわち、住居廃絶後、1層の堆積中ないし堆積後の柱がない状態で1号を

配置し、その後に2号を配置したと推定される。平坦面があるにも関わらず柱穴や炉上に置いている点が意図的である。炉体土器は加曽利E2式で、他の小破片も同時期とみられる。

④複数の層位にわたって少人数の遺体を配置する事例

市谷加賀町二丁目6次3住 [図6] 上から3層：混貝土層、4層：暗褐色土、7層：壁際堆積の暗褐色土が主な覆土である（1・2層は後期墓坑の覆土）。床面直上の炉脇から伸展葬の12号人骨が検出された。頭骨がやや離れて検出しており、頭部を被覆していたものが落下した可能性のある深鉢が近接して横転している。腰の部分に鯨類骨製の腰飾、頭部付近より鹿角製の棒状製品、やや離れて深鉢が出土している。覆土中（4層?）の床上80～90cmの箇所から集骨状態で8・10号人骨（同一人物）が検出され、周囲から加曽利E1式の突起、加曽利E2式の大形破片、イノシシの頭蓋骨・下顎骨が出土している。北側の主柱穴と思われるP2・P3は柱を抜き取った後に覆ったと思われる土層が床下レベルで確認されているが、南側の主柱P28および壁柱穴P29は覆土中から確認されたために覆土形成時にも立っていた可能性が指摘されている。床面への12号の配置後、頭部を除いて土で覆い、しばらく上屋を伴う空隙状態にあった後、4層形成中に8・10号が配置され（この段階で上屋は解体、柱が一部遺存していた可能性がある）、その後3層が形成されたという過程が復元できる。炉体土器・炉に接して床面から出土した土器・12号人骨付近の深鉢はいずれも加曽利E1式である。中峠3次2住 [図5] では、床面と覆土下部土層直上から2体が検出されている。

（2）水平方向の追葬から垂直方向の改葬・追葬へ

以上の4つの類型を時期別に集計すると、多人数床面→多人数複数層位→少人数同一層位→少人数複数層位への時期的変遷を見出すことができる。このうち、多人数床面や多人数複数層位は、人骨が柱穴を避けるように出土している例などもあり、床面段階では上屋が遺存していたと考えられるが、上部貝層への埋葬の段階では上屋は遺存しないので、上記の類型変化は、上屋をもつ家屋への埋葬から、上屋なしの窪地への埋葬という変化を伴う。

全身の1/2以下の部分骨は阿玉台Ⅳ式期から単独葬・複数葬問わず、特に上部貝層出土例みられていたが、複数葬の場合は加曽利E2式期以降の事例の多くが部分骨である。

この変化は、遺体の「二次葬」と、堅穴の「二次利用」という点で関連したものと位置付けられよう。つまり、床面葬と覆土葬、一次葬と二次葬は時期的な変化として統一

的に理解する必要があると考える。

5. 廃屋墓の時空的広がりと普遍性

（1）時空的広がり

廃屋墓は、東京湾岸の中期中葉～後葉に集中するが、山本暉久（2018）には青森県～愛知県の58遺跡が集成されている。これ以外の例を含めて、以下に、東京湾岸以外の関連資料を列挙する（時期は報告書による、詳細不明な例も多く、また報告原文を確認できていないものもある）。

早期

・千葉県向ノ台B地点：茅山式期、覆土、2体

前期

・北海道森川3 H6：円筒下層d式期、未確認

・北海道ハマナス野：HP198 住の覆土にUP228、円筒下層b式期、石皿の間に頭部、胴部は土器片で覆う、盆状の漆製品、つまみ付ナイフ。HP187 住覆土にUP224、頭部と思われる糊状の骨。他に人骨検出されていないが、倒置土器、ベンガラを伴う覆土内土坑多数。脂肪酸分析実施。

・北海道館崎：（詳細未確認）

・千葉県上台（国分旧東練兵場）A地点：興津Ⅱ式期、覆土（上部貝層）、貝層を少し掘窪めて遺体を安置、全身1・頭骨のみ1

・千葉県幸田第Ⅰ地点38住：関山式期、床面、火を受ける、貝で被覆、最上部に片口土器（詳細未確認）

・埼玉県水子15住：黒浜式期、貝層下覆土、女性

・埼玉県打越75住：関山Ⅰ式期、貝層下覆土、上位に壮年男性1、下位に幼児1

・東京都倉輪1号堅穴状遺構：覆土、前期末～中期初頭、成人女性

中期

・北海道白尻B HP10：サイベ沢7式期、フラスコ状土坑から人骨2、土器・石器・魚獣骨（詳細未確認）

・北海道大船C H21内P62 [図7]：大安在B式期、覆土中土坑内の土器被覆下から小児歯

・青森県松ヶ崎2次C地点31住：榎林式期、床面、成人骨

・青森県最花：中期末～後期、床面直上、管玉、伸展葬1・頭骨のみ1

・岩手県上里I-19住：中期初頭、覆土中フラスコ状土坑から7体

・岩手県蛸の浦：大木8b～9式期、人骨10体、火災住居

(未確認)

- ・長野県屋代 SB5319・SB5537・SB5338・SB5340 (以上中期末)・SB5350 (中期後葉) SB5401・SB9009・SB9011 (以上中期中葉)。SB9009は2体、SB9011は4体。
 - ・愛知県林ノ峰敷石：中期末～後期初頭、床面上、被熱
- 後期**
- ・北海道東山：H9 (後期初頭)・H4・H11 (後期中葉) の覆土から後期末～晩期初頭の人骨を伴う土坑5基掘り込み
 - ・長野県村東山手 SB09：堀之内2～加曾利 B1 式期、敷石上。同 S06：臼歯
 - ・長野県上横道7住：堀之内式期、火災敷石住居上
 - ・長野県北村 SB555：加曾利 B1 式期、部分骨、同 SB557：敷石上面から成人女性、
 - ・大分県ボウガキ1住：鐘崎式期、覆土中層に人骨を伴う土坑4基5体 (壮年・幼児)、焼失住居
 - ・大分県法垣 (旧称・大坪) 4次24住：鐘崎式期、覆土中、頭骨が付近より検出、儀礼的離断の可能性 (舟橋京子・田中良之)

晩期

- ・静岡県蛸塚1住：後期末～晩期、覆土中墓坑、貝輪
- このように多くの事例は地域・時期に類例がなく、墓制として確立していたのか、偶然かの判断は難しいが、ある程度普遍的な墓制であった可能性も否定しがたい。また、北海道の覆土内墓坑、長野県屋代遺跡の中期の事例、長野県の後期前葉、大分県中津市ボウガキ・法垣の鐘崎式期例などはまとまった事例であり、その意味を検討していく必要がある。

(2) 地域内・遺跡内での土坑墓との共伴

廃屋墓の論点の1つに、それが特殊な墓であったかどうかという問題がある。東京湾岸に多数の廃屋墓が見られるが、中期の千葉県では同時期には小堅穴、東京都・神奈川県では土坑墓群、後期の千葉県では土坑墓群、再葬土坑などが並行して用いられる。

例えば、市谷加賀町二丁目遺跡に近接する市谷甲良町遺跡では墓坑群と推定される倒置土器を伴う土坑が複数検出されている。加曾利 E3 式の例が多いものの加曾利 E2 式期まで遡る。大膳野南貝塚では廃屋墓9基19体、床下土坑1基、土坑墓1基、土器棺墓6基から検出されている。このうち、床下土坑と土器棺墓は幼児～小児骨に限られるが、廃屋墓では幼児～壮年と幅広い。土坑墓は成人1体のみである。中期末の1例を除き、後期前葉と思われる。

6. 廃屋墓の可能性の追求

(1) 倒置土器と覆土の理化学的分析

内陸部の住居床面倒置土器が、土器被覆葬 (甕被葬) に伴う可能性は古くから提唱されてきたが、決定的な証拠は認められていない (山本2018)。

住居床面倒置土器は中期に限っても、福島県・関東・甲信越地域に広がる広域的な習俗である。但し、廃屋墓における倒置土器は加曾利 E1 式に集中するのに対し、内陸部では加曾利 E2～3 式の事例が多いという差異がある。筆者は廃屋墓の人骨頭部と倒置土器の平面位置を比較し、両者が柱脇という共通の傾向を持つことや、草刈 B516 住を彷彿とさせる群馬県藤岡北山 B D784 住 [図8] の4隅の倒置土器などに注意を払った (中村2017)。

横浜市生麦八幡前 J2 住 [図9] は、奥側 1/2 以上が攪乱で失われていたものの、中央部には貝層、入口部埋甕付近の床面から完形の釣手土器、やや離れて倒置土器が出土した。他遺跡では釣手土器にはしばしば倒置土器が共伴しており、倒置土器=遺体被覆説を検証するためにかながわ考古学財団と東京大学総合研究博物館の共同研究として蛍光 X 線による土壌のリン・カルシウム濃度の計測を企画した (宮内ほか2019)。結果は、口縁部側 (下側) は他のサンプルと大きく異ならず、底部側 (上側) はリン濃度が高いというもので、少なくとも口縁部の下に遺体を置いたという状況は検証しえなかった。但し、貝層からはヒトの歯3本が検出されており、その点では廃屋墓と位置付けられる。釣手土器と人骨が同一住居跡から出土した例としては初めてであるが、倒置土器自体の性格は不明なままである。同様の分析の累積を期待したい。

また、大分県法垣遺跡では人骨が出土した SH24 の土器内埋土 (No.1)、埋土 (No.2) および 14 号掘建柱建物柱痕跡埋土 (No.3)・同堀方埋土 (No.4) でリン・カルシウム濃度の計測と土壌選別が行われ、No.1～No.3 で骨の存在が確認された。

(2) 北海道南部のローム質土マウンド、赤色顔料、漆塗櫛や完形土器を伴う堅穴

北海道南部～東北北部の後期中葉～後葉には、堅穴床面から完形土器が出土する例が顕著に認められる。中には、黒い注口土器と赤い下部単孔土器の共伴例 (八木B)、赤い注口土器と黒い鉢の共伴例 (野田生1)、国宝・十分合掌土偶との共伴例 (風張1) など注目すべき事例を含む。特に野田生1遺跡では、ローム質土がマウンド状に堆積して

いる事例、赤色顔料が散布されている事例、漆塗櫛を伴う事例 [図 11] があり、廃屋墓の可能性が指摘され、リン濃度の分析も行われているが、明瞭な結果は得られていない。

そこで、筆者は類例を集成し、こうした特徴が他の遺跡でもみられることから、一定の習俗として認められることを指摘した。赤色顔料、装身具、完形土器は、中村大 (1998) の墓坑認定基準にもあり、マウンド状堆積を含めて前述のように東京湾岸の廃屋墓にも同じ要素がみられる。なお、マウンド状堆積については、岩手県細谷地遺跡 RA052 (晩期前葉) でも火災痕跡や完形土器を伴う例が確認されており、金子昭彦 (2008) が廃屋墓の可能性を指摘している。今後、覆土の詳細な調査による検証を望みたい (中村 2018a)。

7. 床下埋葬

住居址床面レベルよりも下位の土坑から人骨が出土した場合、①住居廃絶以前 (建設中～居住中)、②廃絶後に床面から掘削、③廃絶後に覆土中から掘削、の3通りが想定されるが、ここでは特に①の可能性が高いものを床下埋葬と呼んでおく。大膳野南 J77 住 (堀之内 1 式期) は漆喰の貼床下に墓坑が確認された①の確実な例で、小児骨が出土している。殿平賀例 (堀之内 1 式期) は土器片に被覆された小児頭骨が検出されており、覆土がローム質土であったことから黒色土を主体とする堅穴覆土形成以前に位置付けられる。さらに、権現原 2 住 (称名寺式期) で乳歯と永久歯、同 12 住 (後期初頭～前葉) で幼児骨 2 基がある [図 10]。この時期には小児骨の床下埋葬が一定の習俗として確立していた可能性が高い。また、石井寛 (2011) は、後期前葉の住居址内や入口部付近に掘りこまれた土坑を集成し、墓坑と推定する。屋外墓坑群との覆土の共通性のほか、華蔵台南 13 住での耳飾の出土などの根拠が挙げられている。

他地域・他時期では以下の例がある。

- ・北海道美々 5 BH2 : 前期、幼児頭骨
- ・岩手県上村 A8 住 : 大木 8b 式期、炉脇の部分的張床下、部分骨最低 5 体分、底部穿孔倒置土器を伴う、住居廃絶後の構築かとされる。
- ・秋田県萱刈沢 1 号フラスコ状土坑 : 円筒上層 a 式期、人骨 2、犬骨、改葬例、小林克 (2019) で葬送過程の復元。
- ・さいたま市黒谷 : 前期 (詳細未確認)
- ・岩手県貝島 : 晩期 (詳細未確認)

8. 課題と展望 : 家屋墓・廃屋墓と他の葬制との関係

最後に、堅穴住居範囲外で行われた他の葬制との関係について課題と展望を示しておきたい。家屋墓・廃屋墓は決して孤立した存在ではないのである。

縄文時代の合葬は、主に後期初頭～前葉の東京湾東岸の事例が社会の再編と合わせて解釈されているが、前述した中期中葉～後葉の廃屋墓内の合葬・追葬・改葬はそれとは異なる社会背景を想定する必要がある。また、東京湾東岸の環状集落外縁での分節単位ごとの廃屋墓の集中は、東京湾西岸の環状集落内部での分節単位ごとの土坑墓群と意味合いが重なる一方、位置の点で対称関係が見出される。両地域の関係性を構造論的に読み解くことは可能であろうか。

後期前半の東北北部の土器棺再葬は、関東の住居内再葬までその影響が達するとの指摘がある (谷口 2017b)。関東においても、廃屋墓の再盛行とともに、明瞭な土坑墓群の形成、配石墓の出現、多人数合葬・再葬の盛行 (廃屋墓を母体とする説がある : 設楽 2008)、「核家屋」前面への土坑の偏在 (住居隣接埋葬・墓坑の増加 : 阿部 2015～2019)、床下土坑の増加など葬制全体に変化が訪れる。後 3 者は改めて関係を問直す必要がある。答えは見いだせていないが、検討にあたっては、意味の共通性ともに、なぜ多様な葬制が展開したかという問題も重要であろう。多人数合葬墓には上屋が存在していたとの想定もあるが、後期の廃屋墓の景観はどのような状況であったのであろうか。

海外の Residential Burial の議論は、上屋を保つ居住中の事例 (床下埋葬) についての議論が多いが、縄文の場合はどうであろうか。柱抜き取り後の例、あるいは覆土中の例など窪地景観という事例は多く、その特徴を意識する必要がある。その一方、居住中 (あるいは家屋使用中) に遺体・人骨を安置していた可能性も考慮すべきである。村田文夫 (2013) は、長野県郷土 24 住の奥壁部 (加曾利 E3 式期) から倒置深鉢 6 個 (うち入れ子 1 組) が検出された事例について、頭骨を祀ったものと想定する。前述のように子と清水遺跡では頭骨が除去されており、山田康弘 (2001) は廃屋墓以外を含め、頭骨のみの出土例 9 例、頭骨の除去 8 例を集成している。これらの頭骨が一時的であれ、どこかで保管されていたことは確実であり、それが家屋・建物内であったことは十分考えられよう。

後期東北の環状列石外周の掘建柱建物でモガリ施設であった可能性がかねてより指摘されているが、小林克 (2019) は、中期後葉～末葉の掘建柱建物と「堅穴遺構」

の伴出例をそれぞれ一次葬・二次葬の施設と解釈し、環状列石に受け継がれるものと論じた。家屋墓を「住居・家屋」から「建物」に拡大するならば、モガリ建物、あるいは霊廟建築なども議論の射程に取り込む必要があろう。

北海道の周堤墓と堅穴住居を結びつける見解は既に提示されているが（大塚 1979 ほか）、上記の土器供献等が盛行する時期には、堅穴内に複数の土坑をもつ例が白尻C遺跡、釜谷2遺跡などにある。他の堅穴で確認されているような周堤を想定すれば、規模は別として周堤墓と同じような景観が出現する（中村 2018a）。小杉康（2013）は、後期前葉の環状列石＋堅穴墓域と後葉の周堤墓を繋ぐものとして「野田生型廃屋墓」を位置付けている。

このように、廃屋墓は他の墓制や、再葬・核家屋・環状列石などの縄文社会論のキーワードと密接に関わりながら展開しており、総合的な検討が必要である。

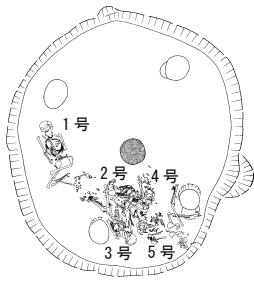
（2019年9月1日脱稿）

〒328-8588 栃木市平井町608 国学院大学栃木短期大学

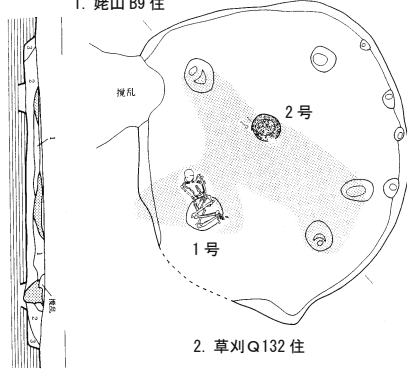
引用文献

- 阿部友寿 2015～2019「関東南部における住居と墓の関係（1）～（5）」『神奈川考古』第51号～第55号
- 石井 寛 2011「縄文時代後期の住居址内土坑」『縄文時代』第22号
- 石川 健 2014「房総半島における縄文時代の遺体毀損事例」『東アジア古文化論叢』Part2、中国書店
- 大塚和義 1979「縄文時代の葬制」『日本考古学を学ぶ3』有斐閣
- 金子昭彦 2008「東北地方北部における縄文晩期の廃屋墓」『縄文時代』第19号
- 小杉 康 2013「大規模記念物と北海道縄文後期の地域社会について」『北海道考古学』第49輯
- 小林 克 2019「東北北部環状列石研究の現段階」『物質文化』99
- 佐々木藤雄 1986「縄文時代の家族構成とその性格－姥山遺跡 B9号住居址内遺棄人骨資料の再評価を中心として－」『異貌』第12号
- 設楽博己 2008『弥生再葬墓と社会』塙書房
- 鈴木克彦 2009「東北北部の堅穴内土坑（墓）」『北海道考古学』45
- 高橋龍三郎 2007「関東地方中期の廃屋墓」『縄文時代の考古学9』同成社
- 谷口康浩 2017a『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』同成社
- 谷口康浩 2017b「柄鏡形敷石住居と再葬制の接点」『二十一世紀の考古学』六一書房
- 千葉南菜子 2019「白骨切断死体－千葉市有吉北貝塚 SB096-A 人骨の知見」『千葉縄文研究』9
- 土井義夫（ど署名）1985「同人言」『物質文化』第44号
- 中村 大 1998「亀ヶ岡文化における葬制の基礎的研究（1）」『国学院大学考古学資料館紀要』第18輯
- 中村耕作 2016「廃屋墓における葬送儀礼の諸行為－縄文時代中期・後期の東京湾岸地域の事例－」『国学院大学栃木短期大学日本文化研究』創刊号
- 中村耕作 2017「住居柱脇の倒置土器」『二十一世紀考古学の現在』六一書房
- 中村耕作 2018a「縄文時代後期後半・北海道南部における堅穴廃絶と儀礼行為」『縄文時代』第29号
- 中村耕作 2018b「縄文時代廃屋墓における追葬・改葬行為」『考古学研究』第65巻第1号
- 花輪 宏 1995「屋内葬考－類型と性格－」『考古学研究』第42巻第1号
- 堀越正行 1986「京葉における縄文中期埋葬の検討」『史館』第19号
- 堀越正行 2006「姥山の五人－住居床面葬の検討－」『考古学文集』茅野市尖石縄文考古館
- 宮内信雄・吉田邦夫・中村耕作 2019「生麦八幡前遺跡」2号住居覆土の土壌分析と倒置深鉢・埋甕について」『生麦八幡前遺跡』かながわ考古学財団
- 村田文夫 2003「炉石・焼土の行方と頭蓋骨を祀った住まい考」『考古学の諸相Ⅲ』
- 山田康弘 2001「縄文時代における人骨頭部の取り扱い方」『情報祭祀考古』第20号
- 山本暉久 2015「廃屋墓葬をめぐる研究動向について」『縄文時代』第26号
- 山本暉久 2018『住居の廃絶と儀礼行為』六一書房
- 渡辺 新 2006「－市川市姥山貝塚接続溝第1号堅穴－5人の死体検案」『千葉縄文研究』1
- Adams, R. L. and King, S. M.(eds). 2011, *Residential Burial: A Multiregional Exploration (Archeological Papers of the American Anthropological Association,20)*
- Toohey, Jason L., et al.2016 Theorizing residential burial in Cajamarca, Peru: An understudied mortuary treatment in the Central Andes. *Journal of Anthropological Archaeology* 43
- 李永强 2017「中国史前居址葬俗刍议」『考古研究』2017-6

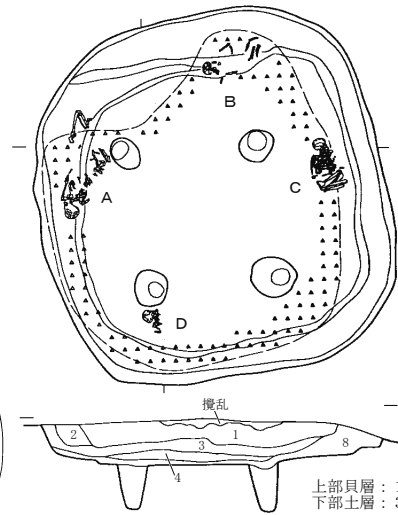
※紙面の都合で掲載できなかった文献は付属CDに収めた。



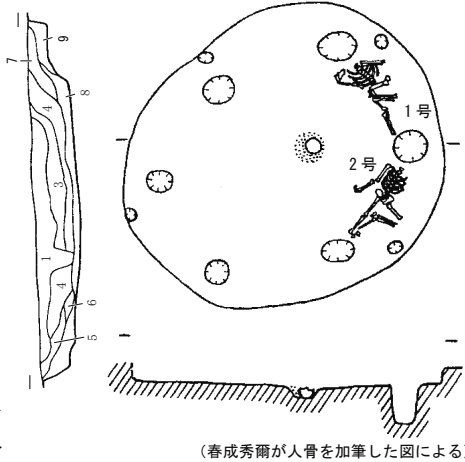
1. 姥山 B9 住



2. 草刈 Q132 住

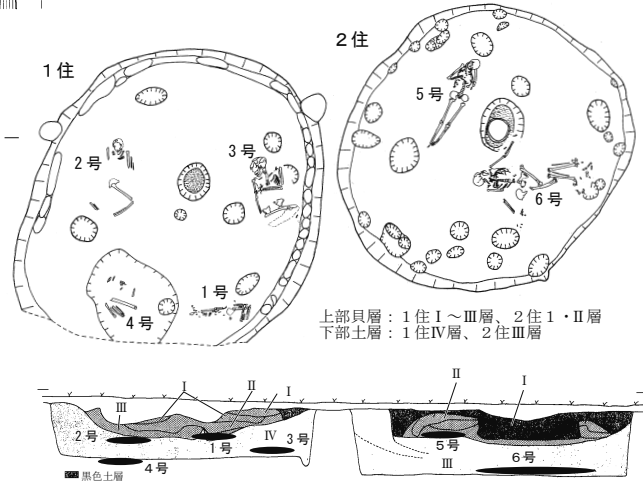


3. 草刈 B516 住

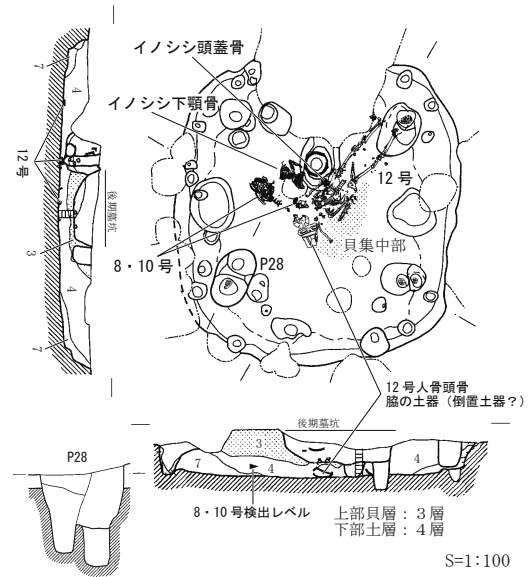


(春成秀爾が人骨を加筆した図による)

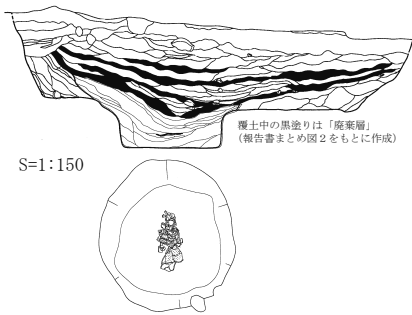
4. 子和清水



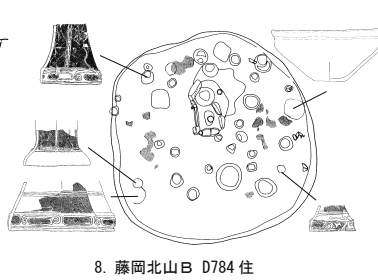
5. 中峠 3次1住・2住
(断面図上の人骨の位置は床面からの検出レベルをもとに加筆)



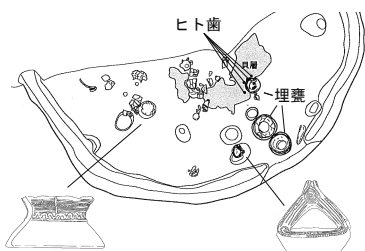
6. 市谷加賀町二丁目3住



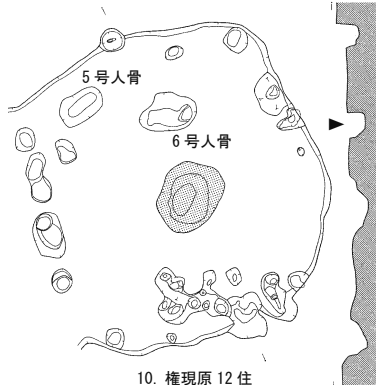
7. 大船 C H21 住内 P62



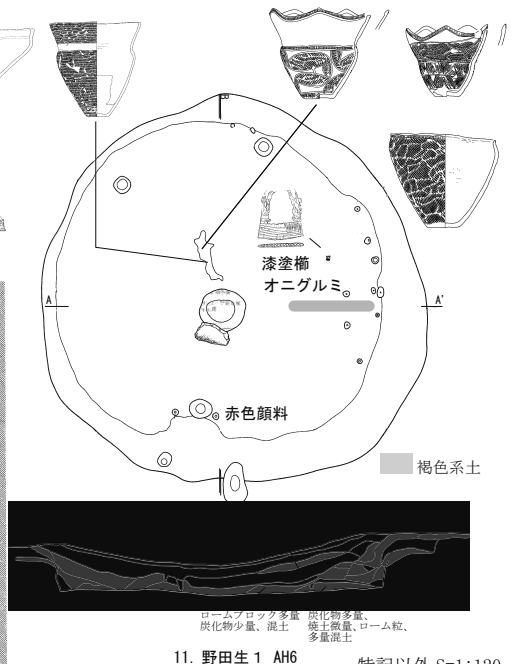
8. 藤岡北山 B D784 住



9. 生麦八幡前 J2 住



10. 権現原 12 住



11. 野田生 1 AH6

特記以外 S=1:120

—— 縄文時代文化研究会 第2回研究集会実行委員会 ——

実行委員長 山田康弘

実行委員 阿部昭典 大網信良* 長田友也 坪田弘子 中村耕作 浜田晋介 平山尚言 領家玲美
(*本書編集担当)

第2回研究集会 発表要旨

縄文時代葬制研究の現段階

発行日	2019年12月7日
編集・発行	縄文時代文化研究会 〒249-0006 神奈川県逗子市逗子7-1-10 鈴木保彦方
印刷	TEL 046-873-6943 光写真印刷株式会社
